五五

この戰慄すべき光景、この絶望的の格闘、そしてこの悲慘な終局は私を全く疲憊させて了つた。私は子供のやうに弱々しくなり殆んど失神するばかりであつた。けれどもこの時バグ・ヂャルガルの聲がして、それは私に新らしい生命を吹き込んでくれた。

『兄弟よ』と、彼は上から怒鳴つた『早くそこをお立ちなさい、太陽はもう半時間で沈んで了ひます、私は下におりて待つてゐますから、ラスクに跟いておいでなさい』

彼の友情濃やかな言葉は私に、希望と生氣と活力とを奮ひ起させてくれた。私は立ち上りそして犬と一緒に出かけた。犬に導かれては行くうちに私は頭上に日光を覺えた。そこに通路の出口があつたのだ。私は初めて自由に呼吸することが出來た。私は暗い息づまるやうな窟洞を通つて來る途中、圖らずも彼の侏儒の豫言が適中したことを思ひ出した。

『二人の中一人だけがこの路を通つて歸るのだ』

それは彼の期待には裏切つたであらうけれども兎に角豫言は適中したわけである。

五六

「私が谷間に辿りついた時に、バグ・ヂャルガルはそこに待つてゐた。私は身をもつて彼の腕に投じた。私は彼に訊いて見たいことは山ほどあつたのだが、その時は一語をも發することが出來なかつた。

『まあ聽いて下さい』と、彼が言つた『あなたの奥さん——私の姉妹——は無事ですよ、私は奥さんを白人の陣營までお伴れしました。私は哨兵を指揮してゐるあなたの親類の方に行つて奥さんを托しました。そして私の身替りに捕へられてゐた十人の仲間の命を助けて下さい私は刑につきますからとお話しすると先方でいふのには、黑人の陣に歸つてあなたを救ひ出してくれとのことでした。ところがラスクは私を導いてあなたの居たところへ行つたのです、實に好ひでした、間に合つてほんとに好い都合でした。もうこれであなたも生き、私も生きました』

彼は私の方へ手を差出した。

『御滿足ですか』

再び私は私の心臟を彼に押しつけた。私は決してもう私の傍を去つてくれぬやう、何うか一緒に白人の中にゐてくれるやうにと彼に賴んだ。そして私は白人の軍隊に於ける彼の地位を贈らうと言ひ出した。すると彼は怒つたやうな顏色をして遮つた。

『兄弟よ、私が曾てあなたに、自分の隊へ來るやうにと勸めたことがありますか』

私は自分の惡かつたことを知つて答へに窮した。

『さあ〳〵』と、彼はまた快活に言つた『早く行つて奥さんの顏を御覽なさい、そしてあなたもゆつくりお休みなさい』

これは私にとつて全く必要なことだつた。私は直ちに立ち出した、バク・ヂャルガルは道を知つてゐるので先に立ち、ラスクは私の後からついて來た。

此處まで語つて來て、ドーヴェルニーは非常な悲哀の色を浮べながら右左の人々を見廻した。汗の玉が彼の額に雫をなして溜つてゐた。彼は手をもつて顏を蔽ふた。ラスクまで何んだか不安を感じたやうに彼の顏を見上げた。

『さうだ』と、彼は呟いた『お前が不思議さうに私の顏を見るのは尤もだよ、ラスク』

そのうちに彼は立ち上つて、非常に昂奮したらしく天幕の外へ飛び出した。犬と軍曹とは彼に從つて出て行つた。

五七

『確かにもう物語りは終りに近づいて來た』と、ヘンリが叫んだ『若しもバグ・ヂャルガルの身の上にこの後變事が起つたとしたら、それこそ最も悲しむべきことだ。彼は實に立派な人間だつた』

バシャルは唇から飲みさしの籠に入つた瓶を取つて重々しく言つた。

『彼がたゞ一飲みに飲み乾したといふ、その椰子の盃を見ることが出來たら僕は、葡萄酒を十二籠進呈するがね』

ギターを取つて夢心地に搔き鳴らしてゐたアルフレッドは、俄に手を休めてヘンリ中尉にその肩締をしつかり締めるやうにと言つた。

『黑人の話は非常に面白かつた』と、彼が言つた『併しまだ僕は「バディラ美人」の歌を聞いたか何うか、ドーヴェルオーに質問する折を得なかつた』

『ピアスといへば中々知られた人間だ』と、バシャルが言つた『彼は少くともフランス人を知つてゐる、若しも僕が彼の俘虜になつてゐたら胃囊をうんとふくらましたんだ。我々の債主はピアスよりはもつと冷酷だからね』

『宜しい、諸君、今の大尉の物語についての感想は如何ですか』と、ヘンリが話しかけた。

『その事だ』と、アルレフッドが言つた『僕は今の話に深く心を留めてゐなかつた。僕は最初から夢想家ドーヴェルニーの話としては、もう少し面白いことが出るだらうと期待してゐたのだ。これは餘り講談めいてゐるではないか、僕は講談はさう好きではない、彼の歌の節こそ聞きたかつた、要するにバグ・ヂャルガルの話は退屈だつた、餘り長過ぎた』

『君の方に通りだ』と、バシャルが言つた『全く長過ぎた、こゝに煙草や酒の用意が無かつたら、今夜は隨分惱まされたのであつた。考へて見給へ、物語の中には隨分變手古なことがあつたぜ、例へばだね、あの術使ひの一寸法師、名前は忘れたがアビバスとか何んとか言つたね、そいつが敵を溺れさせやうとして自分が溺れたなどは頗る受け取れないね』

『特に水の中では』と、バシャルが笑ひながら言つた『まあ僕の聞いた限りでは、面白いと思つたのは、バグ・ヂャルガルが出るたびに彼の跛の犬が出て來ることだ』

そのうちにドーヴェルニーが外から戻つて來たので、彼等の話は止んで了つた。ドーヴェルニーは腕組をしたまゝ默つて彼方此方と歩き續けてゐた。老ひたるタディーは片隅にシーツを敷いて無心のラスクは撫でながら、大尉の方をつく〳〵と眺めてゐる。終にドーヴェルニーは囘復してまた語り出

した。

八

『ラスクは私たちの後を追つて來た、谷の岸壁の頂上に日光は薄らいで消えた。ところが突然に鮮かな光りが射して來たので黒人どもは戰慄しながら私の手を捕へた。

『お聞きなさい』と、彼が言つた。

鈍く重たい音が、谷の兩側に反響して大砲でも鳴らしたやうに轟いた。

『これは合圖だ』と、バグ・ヂャルガルが言つた『あれは大砲の音に違ひない』

私も同意して頷いた。

二跳び跳ぶと彼は岩の頂に上つてゐた、私もその後に續いた。彼は組腕をして悲しさうな笑ひを浮べた。

『あなたはお分りですか』と、彼が言つた。

私は彼が指示す方向を見やつた。遙か向うに大きな黒旗が飜つてゐて、日光は尙その旗だけを照らしてゐた。

此處まで語つて來てドーヴェルニーは言ひ淀んだ。

『後になつて漸く分りました』と、彼は續けた『それはピアスが逃げ出したので、それに彼はもう私が殺されたことゝ思つて、私の處刑に選まれたモーン・ルージュの黒人等が歸るのも待たずに揚げられ

旗なのであつた』

『バグ・ヂャルガルはそこに立つたまゝ、腕を組んで彼の不幸を告げる黒旗を眺めてゐたが、突然に鐘を返して岩を下りかけた。

『あゝ主よ、主よ、不幸なわが友よ』

此う叫びながら彼は私の傍に立ち寄つて來た。

『あなたは大砲の音を聽きましたか』と、彼が問うた。

私は答へをしなかつた。

『あれは合圖なんです、兄弟よ、私の同胞が銃殺される合圖なんです』

彼の頭はがくりと胸の上に垂れて了つた。そして彼は私の傍へぢり〳〵と詰め寄つて來た。

『あなたは奥さんのところへお歸りなさい、道案内はラスクが致します』

彼は黒人の調子で口笛を吹いた。犬は尾を振りながら而も心配さうな顔付をして、谷間の妙なところから出て來た。

バグ・ヂャルガルは私の手を取りた。そして無理に唇を歪めて笑つた。

『左樣なら』と、彼が言つた。言ふが早いか彼の姿は私を取り巻く茂みの中に消えて了つた。

私は石に化けた者のやうに立つてゐた。何んだか譯は分らないが兎に角危險の迫つて來たやうな氣がしてならなかつた。

ラスクは主人の後を見送るやうに尾を振りながら岩の上に駈け上つて一聲長く吠え立てた。そして

彼は私の足もとに戻つて來て尾を脚の間に挿んで了つた。彼の大きな眼は涙に霑つてゐた。彼は不安らしく私の方を眺めてゐたが直ぐに、主人が飛び下りた岩の彼方へ廻つて幾度も〳〵吠え立てゐるのであつた。私には彼の心が分つた、私はづか〳〵と進んで彼の傍に行つた。すると彼はバグ・ヂャルガルの選んだと思はれる道を傍うて駈け出した。私は全速力で走つた、けれども彼が私の追ひ付くために時々休んでもくれなかつたら、直ちに彼の姿と見失つて了ふところであつた。私は此うして谷また谷を駈け拔けて、山また山を駈け越えた。最後に——。

ドーヴェルニーの聲はもう聞き取れないやうになつた。その顏色を見ても一方ならぬ心の惱みを汲むことが出來る。

『君、その後を話してくれ、ダディー』と、彼は息も絶え〴〵に呟いた『私にはもうこれ以上話す元氣がない』

老軍曹は既に大尉と同じ苦しみを覺えてゐたのであつたが、上官の命令に從つて物語りの後を續けた。

『大尉殿、あなたがお止めになつては私が話さぬ譯には參りません。諸君、バグ・ヂャルガル、又の名ピエローは實に穩かな、强い、勇氣ある、大尉殿を除いては世界に於ける最も立派な戰士でありました。然かる私は最初から、別段の理由もなく彼を憎みました。これは私の一生の過ちでした。そして大尉殿あなたの殺される日が二日目の夕刻だと云ふことが味方に分つて參りました時、私は彼の勇將に對して一層激しい怒りの念を抱いたのであります。私は彼を殺してあなたの復讐をし、若し逃亡

すれば部下の十名を銃殺して身替りにすると言つて彼を責めました。その時彼はたゞ默つてゐました。ところがらその後一時間のうちに牢の壁に大きな穴を開けて逃げて了つたのです。』

ドーヴェルニーは堪えきれなくなつて身を悶えた。

『宜しい』と、タディーが言つた『私が山の頂に大きな黑旗を望んだ時、彼は歸つて來なかつたりれども私は別に不思議にも思ひませんでした。味方の士官に命令して合圖の大砲を發射させました。そして私に十人の黑人を定めの刑場へ送らせました。私は刑場に着いて彼等は列びました。するとそこへ驀然飛び込んだ一人の春の高い黑人がありました、彼は息を切つて私の傍へ寄つて來ました。

『私は時間を違へずに歸つて來ました、ディさん今晩は』と、彼が叫びました。

『さうです、諸君、それから彼は一言も口をきかないで、いきなり仲間の傍へ行つて繩を釋き初めました。その時彼等の間には仁義の問題で盛に議論があつたやうでしたが、終に彼は十人の代りに立ちました。すると例の大きなラスクが飛んで參りまして、私の喉に喰ひ付きました。けれどもピエローが合圖をして犬を制したので、犬は直ちに私を見捨てゝ自分の主人の足もとに坐つて了ひました。大尉殿、私はあなたが殺されたものと思ひ込んでゐました。私は腹立たしくもあつたので一發の彈丸で……』

そう言つて軍曹は手を上げ大尉の方を見てゐたが最後の言葉は口に出す力が無かつた。

『バグ・ヂャルガルは例れました、一發は彼の犬の脚を挫きました。諸君、その時以來この犬は跛になつたのです。私は附近の森の中で唸り聲を聞きました。行つて見るとそれが大尉殿あなたであつた

のですあなたは彼の脊高の黒人を救はんとして駈けつけた時流れ丸に當つたのでした。あゝ大尉殿、あなたは負傷者となり、バグ・ヂャルガルは死人となつて了ひました。私たちは直ぐにあなたを陣營の中にお連れいたしました。幸にも傷は淺かつたので、あなたは間もなく回復なさいました。それにはマリイ夫人のお手當も力があつたことは明らかです』

軍曹もこゝに至つて物語りを進めることが出來なくなつて了つた。ドーヴェルニーは嚴然たる、そして悲哀に打たれた聲を揚げて付け加へた。

『バグ・ヂャルガルは死んで了つた』

ダディは頭を垂れた。

『左樣、彼は私の生命を救ひましたが、私は彼を殺して了ひました』

その後の戰ひに於てドーヴェルニーは、自分から索めて敵の堅壘に向ひ、半ばそこを陷れて味方の勝利にならうとする時、ダディと共に敵彈に當つて斃れて了つた。ラスクも彼の死骸の傍に自分の死骸を横たへてゐたといふことである。

——(了)——

バクヂャルガル

大正十年十月十五日印刷
大正十年十月十日發行

不許複製

定價壹圓

譯者　古舘清太郎
發行者　鷲尾浩
東京市日本橋區本銀町二ノ八
印刷者　宮田亀六
東京市神田區西小川町二ノ六
印刷所　大成社
東京市神田區西小川町二ノ六
發行所　冬夏社
東京市日本橋區本銀町二ノ八
電話本局三一一二番
振替東京四五四六番

506
75

終